

Richard F. Calichman. Beyond Nation : Time,
Writing, and Community in the Work of Abe Kōbō

大場, 健司
九州大学大学院地球社会統合科学府 : 博士後期課程三年

<https://doi.org/10.15017/1901732>

出版情報 : 九大日文. 28, pp.112-115, 2016-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

◎書評

Richard F. Calichman. *Beyond Nation: Time, Writing, and Community in the Work of Abe Kōbō*

大場 健司

近年、安部公房（一九二四—一九九三年）研究はますます盛んになっていく。安部公房研究書の刊行も相次ぎ、二〇一六年になつてからだけでも、李先胤『21世紀に安部公房を読む——水の暴力性と流動する世界』（勉誠出版、二〇一六年七月）が刊行され、坂堅太『安部公房と「日本」——植民地／占領経験とナショナル・リズム』（和泉書院、二〇一六年九月）も刊行されることになっている。このような安部公房研究の発展は、英語圏においても散見される。近年、アメリカでは、クリストファー・ボルトン（Christopher Bolton）によるSF論 *Sublime Voices: The Fictional Science and Scientific Fiction of Abe Kōbō*（Cambridge and London: Harvard University Asia Center, 2009）が発表されており、異孝之（一九五五年—）による書評では、「ポストモダン・サブライム」（postmodern sublime）を扱った安部公房研究として評価されている。

（Science Fiction Studies 38, July 2011）。同様に、「ポストモダン（postmodern）な観点から、安部によるネーション（nation）批判を論じたのが、今回、この書評で取り上げられているリチャード・F・カリチマン（Richard F. Calichman）の *Beyond Nation: Time, Writing, and Community in the Work of Abe Kōbō*（Stanford: Stanford University Press, 2016）であった。

著者のカリチマンはコーネル大学（Cornel University）で博士の学位を取得し、現在はニューヨーク市立大学シティ・カレッジ（The City College of New York）の教授として日本研究（Japan Studies）を行っている。日本では、安部公房のエッセイ集『内なる境界』（中央公論社、一九七一年二月）などのエッセイを英訳した *The Frontier Within: Essays by Abe Kōbō*（New York: Columbia University Press, 2013）の翻訳者として知られている。鳥羽耕史編『メディアアの越境者 安部公房』（森話社、二〇一三年二月）には、カリチマンの論文「（社会理論）としての安部公房」が収録されており、『内なる境界』におけるネーション批判が論じられている。

Beyond Nation: Time, Writing, and Community in the Work of Abe Kōbō というタイトルは、日本語に翻訳すると、『ネーションを越えて——安部公房作品における時間・エクリチュール・共同体』となるだろうか。この著作では、安部の『砂の女』（新潮社、一九六二年六月）や『他人の顔』（講談社、一九六四年九月）、『内なる境界』といった小説、エッセイにおけるネーション批判が、「時間（time）や「エクリチュール」（writing）」「共同体（community）」をキーワードにして論じられている。前述した坂堅太『安部公

房と「日本」が、一九五〇年代の作品におけるナシヨナリズムを論じようとしているのとは対照的に、カリチマンは一九六〇年代の安部に、ナシヨナリズムや共同体を批判する視座を積極的に見いだしていると言ってもよい。

一九六〇年代の安部の作品に、反ナシヨナリズムを見いだすという作業は、筆者も行ってきた。例えば、拙稿「安部公房「ミリタリイ・ルック」あるいは実存主義的アナキズム——短編小説「保護色」、三島由紀夫、ロラン・バルト」(『九大日文』第二五号、二〇一五年三月)では、『内なる境界』所収のエッセイ「ミリタリイ・ルック」(『中央公論』一九六八年八月号)におけるアナキズム(anarchism)を実存主義(existentialism)やポストモダンから論じている。カリチマン自身は「アナキズム」という言葉を用いてはいないが、一九六〇年代の安部の可能性の中心は、「都市」という「内なる境界」へと「国家からの失踪」を行い、共同体外部の「他者」との「通路」を探究しているところにある。

『内なる境界』所収のエッセイ「異端のバスポート」(『中央公論』一九六八年九月)では、「国家」(内部)／「境界」(外部)という二項対立において、「国家」の定住民が抑圧しようとした「境界」の遊牧民のアナキーな流動性が、「都市」(内部の内部)という「内なる境界」に回帰することで、「他者」を排除しようとする「国家」そのものが内部から破壊されている。Beyond nation の "Introduction" では、このような一九六〇年代の安部の「移動」(movement)／「定着」(fixity)におけるノマドロジー(nomadology)が、一九四〇年代の安部の詩にまで遡行すること

で見いだされている。ここで重要なのが、そのような「移動」がアイデンティティや共同体の問題と接続されていることである。カリチマンによれば、「この私」が「くである」という「現前」(present)する「自己同一性」(identity)は、時間の移動(temporal movement)による「反復」(repetition)にやらされて「差異」(difference)が生じることで、常に一時的なものになっているという。かつて、ジル・ドゥルーズ(Gilles Deleuze, 1925-1995)が『差異と反復』(Difference et répétition, 1968)において述べたように、「一切の同一性は、差異と反復の遊びとしての或るいつそう深い遊びによって、見せかけられたものでしかなく、まるで光学的な「効果」のように生産されたものでしかないのだ」(ジル・ドゥルーズ「はじめに」(『差異と反復』上巻、河出書房新社、二〇〇七年一〇月)二二頁)。ネーション・ステート(nation-state)は、人種や民族といった過去の「同一性」を「再現前」(re-present)させることで、自らの正当性を主張するが、それは常に「差異」を含んだ「反復」によって自壊され得るのだ。カリチマンが安部に見いだすのは、そのようなネーションを自壊させるポストモダンな「差異」なのだった。

このような視点から、第一章 "Markings in the sand: On Suna no Onna" では、『砂の女』のエクリチュールが、語り論的に論じられている。『他人の顔』や『燃えつきた地図』は、主人公の手記や報告書が挟まれる構造になっており、先行研究でも手記などの語りが注目されることがある。この章では、『砂の女』における「書くこと」(writing)を扱うことで、語りと時間の問

題が扱われている。章題にある“Marking”とは、ジャック・ゼリダ (Jacques Derrida, 1930-2004) の言う「痕跡」としての「マーク」(mark) を反復させたものだろう。カリチマンは、「メビウスの輪」の挿話に注目することで、主人公が砂の穴から脱出した後に穴での出来事を書いた可能性を示している。その場合、砂の穴での過去の出来事の「マーク」を、未来に「記憶」(memory) として思いだしながら書くことになる。この時、オリジナルな出来事としての「マーク」は、過去のコンテクストから未来に書かれるエクリチュール (écriture) へと「散種」(dissimulation) されることで、その同一性が差異化される。カリチマンは、そのような「痕跡」と「差異」を、「沙漠」の「風紋」(sand patterns) や、「沙漠」を歩く主人公の「足跡」(footprints) の「マーク」に見いだしている。

第二章“The Time of Disturbance: On Uchiuru Henkyō”では、先行研究の少ない『内なる辺境』が扱われている。前述した『メディアの越境者 安部公房』所収の『内なる辺境』論とは異なり、同時代の言説やコンテクストにはあまり触れず、安部のエッセイにおける時間／空間の問題が扱われている。『内なる辺境』では、国家による「定着」と、その外部のノマド (nomads) による「移動」が対比されている。カリチマンによれば、国家が表象するのが、「国土」(land) や「領土」(territory) といった「空間」(space) に基づく「空間的な同一性」(spatial identity) であるのに対し、ノマドが表象するのは「時間」によってもたらされる「差異」なのだという。カリチマンは、このような時間／空

間の二項対立に対して、時間／空間 (space-temporal) の交差する視点を示しながら、安部のユダヤ人論の吟味を行っている。ところで、カリチマンとは違った視点から、『内なる辺境』における「時間」を同時代言説との関係で読んでみるとどうなるだろうか。例えば、安部が『内なる辺境』で用いた「同時代感覚」という言葉は、一九六八年に世界的に生じた学生運動や、あるいはブラハの春、チェコ事件との関係でも読むことができるのではないだろうか。

第三章“The Lure of Community in *Tanin no Kao*”では、『他人の顔』における語りや共同体の問題が扱われている。『他人の顔』は、主人公が書いたとされるノートや、妻からの手紙が挿入されるといって構造になっている。この章では、第二章で『砂の女』が語り論的に論じられたように、『他人の顔』におけるノートや手紙の作者／読者の関係が「転移」(transference) して反転可能であることや、主人公による「告白」(confession) の問題が扱われている。更に、ノートや手紙における言語の「物質性」(materiality) に注目することで、言語がつねにすでに宛先に届かない可能性や、意図された限定的な意味には還元されえない可能性を内包していることが示されている。更に、安部のエッセイ「隣人を越えるもの」(『現代芸術と伝統』合同出版、一九六六年二月) における「隣人」(共同体内部の他者)／「他人」(共同体外部の他者) について言及しながら、キリスト教 (Christianity) や日本というネーション・ステートなどといった共同体が形成、拡大される際には、その外部の「他者」が排除され、無視され

ていることが論じられている。安部が『他人の顔』で行なったのは、共同体によって「抑圧」(repress)された在日朝鮮人や黒人といった「他者」を「回帰」(return)させることであった。

カリチマンは、『他人の顔』に、ジークムント・フロイト(Sigmund Freud, 1856-1939)的な「抑圧されたものの回帰」(return of the repressed)を見だし、ネーションからマイノリティへの暴力を論じているのだ。特に、「Korea in Japan」の節は、『他人の顔』における在日朝鮮人の問題について論じる際に必読となることだろう。

第四章「Interventions: Of Abe Kobo」では、安部公房によるネーション批判に注目することで、アメリカの日本研究自体が批判されている。コーネル大学の酒井直樹(一九四六年-)が背表紙のレビューで書いているように、「この著作はまた、アメリカ合衆国と日本における学会の保守的な雰囲気に対するパブリックな抗議にもなっている」(It is also a public protestation against the conservative climate of academia in the United States and Japan)。(つまり、アメリカの日本研究において、「日本」というネーション・ステートと作家を結びつける傾向があることが批判されているのである)。

この著作 *Beyond Nation* のタイトルは、前述した安部のエッセイ「隣人を越えるもの」の英訳版のタイトル「Beyond The Neighbor」に由来するだろう。ナショナリズムを否定し、共同体外部の他者との交通を探究する安部の小説やエッセイには、ポストモダンかつアナキーな現代性を見いださるだろう。他者を排除しようとする言説が溢れる現代にこそ、

安部公房を読むことの意義がある。

安部の小説やエッセイは、ネーションを越えて (beyond nation)、アメリカの「日本研究」というコンテクストに「散種」されることで、そのディシプリンを内部から破壊する契機となった。更に、この研究書を日本における安部公房研究の内部に「散種」させると、文学理論やネーション批判が、テクストの新たな読解可能性を開示させ得ることが示されるのではないだろうか。カリチマンの *Beyond Nation* は、ホルトンの *Sublime Voices* と共に、日本語への翻訳が待たれる一冊となるだろう。

最後に、*Beyond Nation* の目次を掲載しておく。

○ Contents

"Acknowledgements"

"Introduction"

Chapter 1 "Markings in the sand: On *Suna no Onda*"

Chapter 2 "The Time of Disturbance: On *Uchinaru Henkyō*"

Chapter 3 "The Lure of Community in *Tanin no Kao*"

Chapter 4 "Interventions: Of Abe Kobo"

"Epilogue"

"Notes"

"Bibliography"

"Index"

(Stanford: Stanford University Press, March 2016, 288 pages, \$65.00)

(九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程三年、
国立台湾大学大学院外国語文学研究所博士課程交換留学生)